

文化財建造物における伝統的な 塗装材料と修理施工上の課題

Study on Traditional Painting Materials Used on Cultural Properties
Architecture and Its Application to the Restoration of Coatings

北野 信彦

キーワード：文化財建造物、漆塗料、乾性油系塗料、塗装修理、伝統的塗装材料

Keywords: Cultural properties architecture, Urushi paint, Dried oil paint, Restoration coating
Traditional painting material

1. はじめに（問題の所在）

日本列島は、四季が明瞭であるとともに南北に細長い島国であるため、豊かな森林資源に恵まれている。そのため、古くから良質な木材を使用した木造建造物が数多く造られてきた。一例ではあるが、法隆寺や姫路城、日光東照宮などのように、世界文化遺産に登録されている文化財には大規模な木造建造物が多い。このような歴史的な木造建造物（以下：文化財建造物と呼称）の外観の様相は、風雪を経た古色を帯びた素木の状態を呈しているものが多いため、国内外を問わずこれが「日本の文化は木の文化」を体現する古社寺の一つのイメージとして一般に定着している（図1）。

文化財建造物は、創建されてから今日に至るまで、数十年もしくは数百年サイクルの中・大規模修理や普段のメンテナンスが行われてきた。現在では素木に見えるものでも、これらの多くは本来白木の状態であったわけではなく、部材の表面保護や荘厳のために何等かの外観塗装が施されていたと考えられる。この一般的な施工

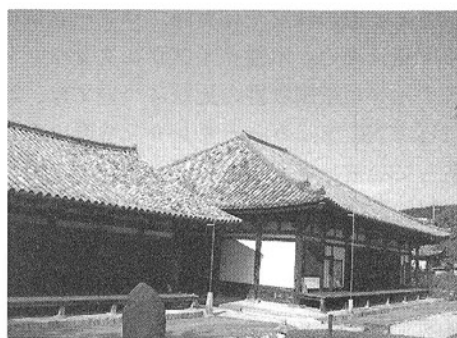


図1 元興寺極楽坊（国宝）

の一つは、今日の寺社建造物や伝統的な民家住宅でも多く見られる外観を赤色塗装する方法である。とりわけ生活や信仰に根ざした多くの寺社建造物では、長年屋外で晒された外観塗装や荘厳彩色の痛んだ状態よりも、新たに鮮やかな色彩で塗り直し修理された方が支持される場合が多い。

しかし、特に歴史的な主要建造物における外観塗装の色相や使用された塗装材料の質感は、その建造物そのもののイメージを極めて大きく左右することも事実である。残念ながら塗装および彩色修理の前後のイメージが全く異なる施工事例も幾つかみられ、このような施工を実施した場合、過去の塗装および彩色の歴史そのものを消滅させるとともに、過去を無視した全く異なった塗装彩色の歴史を今後築く結果にもな

2013年8月6日受付
KITANO Nobuhiko